

胃を切った人の情報紙



ALPHA CLUB

令和6年3月

第464号

「胃を切った人 友の会 アルファ・クラブ」は、胃を切った人が自らの努力と工夫で術後の後遺症を克服していくことを支援しています。会員を募集しています。詳しくは、Webで。

胃を切った人

検索

<http://www.alpha-club.jp>

■代表理事

青木照明

東京慈恵会医科大学 客員教授

■理事

上西紀夫 (東京大学名誉教授)

鈴木 裕 (国際医療福祉大学病院 院長)

高山美治 (医学ジャーナリスト)

梨本 篤 (舟江診療所 所長)

波乱に満ちた父の88年の生涯



「胃を切った人 友の会 アルファ・クラブ」は、胃を切った人が自らの努力と工夫で術後の後遺症を克服していくことを支援しています。会員を募集しています。詳しくは、Webで。

私が、この『遺族ケアガイドライン』(日本サイコロシオンコロジウム学会・日本がんサポーターティープケア学会編。2022年発行。金原出版)を寄稿するに至った経緯から申し上げます。昨年11月初旬、本紙編集部から『術前を基準としな

い60点主義の勧め』(本年1月号掲載)の執筆依頼メールが届きました。しかし、私の「即、返信主義」は実行できず、翌日なつて「父

が他界したため、返信が遅くなりました」とご返事しました。

編集部からは、即、丁寧なお悔やみの言葉を添えてガイドラインが送られてきました。

「遺族となれば、医療者の立場で執筆願いたい。適切な筆者が見つかるのを待っていました」と記されていました。

父眞勝(写真)の88年の生涯は、波乱に満ちたものでした。私が生まれるまでは喜劇俳優ティチャーとして活躍しました。その後、教

職に就きました。15年前に妹のサツチーと「お笑いコンビ・めいどのみやげ」(サンミュー

あるふぁ随筆

父の死と、遺族ケアガイドライン



佐川 まさの

ジック所属)を組み活動を再開しました。映画『陸軍落語兵』で1971年にデビューし、『哀愁しんでれら』(2021年)が最後の作品となりました。実は、ちょうど1年前、この2作が映画館でリバイバル上映され、家族4人が揃って「奇跡の鑑賞」を果たしました。

『遺族ケアガイドライン』

本書は「がんなどで大切な人の死別に直面した人々への治療と援助・支援の方法を示した指針」です。遺族の複雑性悲嘆は「遷延性

悲嘆症」の診断名

で精神障害に位置付けられ、家族は「第一の患者」として患者さん同様にケアの対象です。

■悲嘆に対する支援

悲しみとともに生きる…支援は悲

しみを取るために行うのではなく

悲しみを抱えながら人生を再出発

するために行われるものです。支

援者は、日常生活を問題なく送っ

ている遺族も、悲しみが消えてい

ないことを忘れてはいけません。

「語り直す」機会をいただきたい。編集部に感謝申し上げます。

医療者と遺族の声

医療者との関わりが遺族の悲嘆に影響する…闘病中の病院での傷つきなどの感情は消えません。一方で死が近づき悲嘆の中でも大切にケアされた体験は温かい思い出としてその後の遺族を支えます。

開けてはいけない私の箱…遺族の多くは「開けてはいけない箱」を抱えて生活しています。その箱を開けると、今でもあの時と同じ想いが出てきて日常生活が送れなくなってしまう。

■非薬物療法…カウンセリング、リラクゼーション、運動療法などは、臨牀的関与が必要な精神心理的苦痛に抑うつや悲嘆の軽減を目的に行うことが提案されています。

■最後に…遺族としては「開けてはいけない箱」を心の一番大切な場所に抱きしめて、医療者としての「遺族の支えになるケア」を一期一会の気持ちで行っていただきたい。

「語り直す」機会をいただきたい。編集部に感謝申し上げます。

父は死の半月前まで舞台に立ちました。死因は特発性間質性肺炎でした。母、私、妹、愛犬・豆柴を前に、「幸せな人生だなあ。皆さんに感謝しているよ」。最後の言葉を残しました。

東京女子医科大学附属足立医療センター 外科助教/医学博士/管理栄養士



胃全摘後、鉄とビタミンB₁₂欠乏症との闘い

術後に医師の説明がなかったことが悔やまれる

アルファ・クラブ会員 横井 幹裕（69歳）



胃がんの原因はストレス？

学校卒業後はR省に採用され、東京・霞ヶ関で仕事をしていましたが、30代後半に妻の実家のある静岡県に転勤し、R省の出先機関に勤務していました。

50代に入り、役職が上がるにつれて仕事上のストレスも増え、酒量も減らない状態が続き、胃痛を抑えるための胃薬を服用する日々が続いていました。

平成25年（58歳）の6月、浜

松労災病院で人間ドックを受けたところ、胃カメラによる再検査が必要となり、早速、検査を予約して受診すると、ステージⅠAの胃がんと診断されました。職場には、手術のため1カ月ほど入院しますと説明しました。

担当医師と相談して入院手続きをし、手術の数日前には妻も呼ばれ、病状と手術の説明を受けました。8月13日の手術は腹腔鏡下で行いましたが、持病の喘息の症状もあり、10時間余りをも要する手術となりました。また、リンパ節への転移もあったため、結果的に胃全摘・胆嚢摘出となりました。

労災病院を9月4日に退院し、2週間の自宅療養を経て職場復帰ができましたが、食事は半減し、体重も60kgから50kgに落

ちました。その後は、昼食の後に小さいおにぎりをとるようになっていましたので、ダンピング反応はそれほどひどくはありませんでした。

2度の腸閉塞

抗がん剤のティーエスワンは2年間ほど服用しましたが、幸い副作用もなく、数カ月ごとの定期検査でも転移などは見られませんでした。

手術から2年が経過し、定年



娘の結婚式でアルトサックスを演奏（平成26年11月16日）

後は自宅に近い職場で事務の非常勤職員として勤務を続けていましたが、平成29年（62歳）の5月に腸閉塞を発症し、労災病院に再入院しました。イレウス管の挿管による保存療法で治療してもらい、2週間で退院することができました。

悪いことは続くもので、令和4年（67歳）の12月には、2度目の腸閉塞を発症し、別の病院に入院しました。イレウス管の挿管による治療では効果がなく、2度目の腹腔鏡下手術を行いました。幸いにも2週間で退院することができました。

しかし、その後、貧血の症状が現れてきました。原因はビタミンB₁₂の欠乏でした。

2年ほど前から、職場の定期健康診断では、「貧血」との所見があり、要精密検査と書かれていましたが、特に自覚症状もなかったため、検査は受けていませんでした。

音楽活動に参加

趣味といえば、学生時代から30代前半まで、市民吹奏楽団で吹いていたアルトサックスです。静岡への転

勤後は仕事も忙しくなり、活動から遠ざかっていましたが定年退職を機に、地元の市民吹奏楽団の演奏活動に参加していました。しかし、最初の腸閉塞の入院で定期演奏会に穴をあけてしまったこともあり、皆様に迷惑をかけては申しわけないと思い、やむなく退団しました。しかし、それでも音楽活動は何か続けたいと思っていました。

地元の市民文化会館が新築され、ベートーベンの「第9合唱」(東京フィル、バツティストーニ指揮)のこけら落しが企画されました。早速、この合唱団に参加を申し込んだところ、運よくメンバーに選ばれました。

令和4年8月から練習が始まりましたが、後半にさしかかった頃、2度目の腸閉塞で入院してしまいました。

この頃から「貧血」を自覚するようになり、合唱の練習では30分立っていることもできず、令和5年3月21日の演奏会本番は冷や冷やの状態を迎えました。

やっとビタミンB₁₂不足の治療を

貧血の原因がわからず過ごしていました。令和5年6月の

人間ドックの結果で精密検査を勧められ、消化器内科、循環器内科で再検査を受けました。非常勤の年輩の医師から、貧血の原因は「胃全摘によるビタミンB₁₂の欠乏」と診断されました。血液検査では、ビタミンB₁₂の数値は114(基準値は249~938)、鉄分の数値も10・7(基準値は13・0~17・6)と、基準値以



▲▶磐田市民文化会館のこけら落しで「第9」を合唱(令和5年3月21日)

下だったため、メチコパール(ビタミンB₁₂製剤)とフェジン(鉄剤)の注射をしてもらいました。1ヵ月後の検査では、ビタミンB₁₂の数値は254と、なんとか基準値内に入り、貧血も改善しました。その後は、労災病院から自宅近くのかかりつけ医に紹介状を出してもらい、治療を継続しています。

しかし、日々、倦怠感^{けんたいかん}があり、勤め先でも具合が良くないと横になることがありました。休日は、食後2時間ほど横になる状態が続いています。

ビタミンB₁₂の数値は、ほぼ基準値内であるため、メチコパールの筋肉注射は2ヵ月ごとで良いといわれていますが、2週間もすると倦怠感でつらくなってくるため、アリナミンF50(ビタミンB₁製剤)の点滴をしてもらっています。

また、右手の爪が層状に割れたり、味覚障害もあるため医師に相談したところ、亜鉛不足といわれました。検査では、亜鉛の数値が42(基準値は80~130)と、基準値以下だったためノベルジン(亜鉛製剤)も処方してもらっています。また、牡蠣^{かき}、レバー、

カシユーナッツが良いといわれ、これらをとるようにして徐々に改善しています。

これからの生き方

胃を全摘して5~6年たつと、胃壁からの内因子が分泌されなためビタミンB₁₂が吸収されなくなり、体内に蓄積されたビタミンB₁₂を使い切ってしまうので貧血になるといわれています。今思うと、手術後に医師からこのような説明がなかったのがとても残念です。

かかりつけ医師から「ビタミンB₁₂の注射は死ぬまでずっとですよ」といわれました。いつまでつらい日々が続くかわかりませんが、もっと良い薬が出るまで医学の進歩に期待するしかありません。

仕事も当面は続け、音楽の趣味も何らかの形で続けたいと思っています。今、猫の額ほどの家庭菜園(庭先のベランダ)で野菜を作っています。プチトマト、しょうが、みょうが、オクラ、ナスなどの季節の野菜作りが今のところはストレスの発散になっています。

(静岡県磐田市)